

『朱子語類』 卷二六～卷二九 訳注 (二二三)

二松学舎大学宋明資料輪読会里仁篇班

石原伸一

岡野康幸

序言

本稿は、『中國哲學』第五十号（北海道大學中國哲學會、令和五年発行）に掲載の『朱子語類』卷二六～卷二九訳注（二二三）の続稿である。本訳注（二二三）は卷二七里仁篇下「子曰參乎章」を検討し、報告する。訳注（二）の巻頭に記した「序言」「凡例」は、原則として本稿においても踏襲しているので、（二）を参照されたい。

輪読会里仁篇班の参加者は、石原伸一（茨城高等学校・茨城中学校教諭）、岡野康幸（群馬医療福祉大学専任講師）、小幡敏行（横浜市立大学教授）、久米晋平（秀明大学専任講師）、中根公雄（二松学舎大学非常勤講師）である。

各条の担当者は、卷二七里仁篇下「子曰參乎章」（里15・63～83）が石原伸一・岡野康幸である。

〔里15・63／二七・一七九〕

本文

蜚卿問、恕字、古人所說有不同處。如己所不欲、勿施於人、便與大學之契矩、程子所謂推己、都相似。如程子所引乾道變化、各正性命、及大學中說有諸己而後求諸人、却兼通不得、如何。曰、也只是一般。但對副處別、子細看便可見。今人只是不曾子細看。某當初似此類、都逐項寫出、一字對一字看。少間紙上底通、心中底亦脫然。且如乾道變化、各正性命、各正性命底、便如乾道變化底、所以爲恕。直卿問、程子言如心爲恕、如心之義如何。曰、萬物之心、便如天地之心。天下之心、便如聖人之心。天地之生萬物、一箇物裏面便有一箇天地之心。聖人於天下、一箇人裏面便有一箇聖人之心。聖人之心自然無所不到、此便是乾道變化、各正性命、聖人之忠恕也。如己所不欲、勿施於人、便是推己之心做到那物上、賢者之忠恕也。這事便是難。且如古人云、不廢困窮、不虐無告、自非大無道之君、孰肯廢虐之者。然心力用不到那上、便是自家廢虐之。須是聖人、方且會無一處不到。又問、以己及物、仁也。推己及物、恕也。上句是聖人之恕、下句是賢者之恕否。曰、上箇是聖人之恕、下箇賢者之仁。聖人之恕、便是衆人之仁。衆人之仁、便是聖人之恕。【道夫】

校勘

- (1) 蜚卿―「蜚卿」は、楠本本は「蜚卿」の二字無し。
(2) 做―「做」は、正中書局本は「求」に作る。

訓 読

蜚卿問ふ、恕の字、古人の説く所に同じからざる處有り。如へば「己の欲せざる所、人に施す勿かれ」は、便ち大學の絜矩、程子の所謂己を推すと、都て相ひ似る。如へば程子引く所の「乾道變化し、各性命を正す」、及び大學中に説く「諸を己に有して而して後に諸を人に求む」は、却て兼ねて通じ得ざるは、如何、と。曰はく、也た只是だ一般なり。但だ對副する處の別のみ、子細に看れば便ち見るべし。今の人只是だ會て子細に看ず。某當初此の類の似きは、都て項を逐ひて寫し出し、一字は一字に對して看る。少間にして紙上の底通じ、心中の底も亦た脱然なり。且如へば「乾道變化し、各性命を正す」は、「各性命を正す」底は、便ち「乾道變化する」底の如く、恕爲る所以なり、と。直卿問ふ、程子、心の如くするを恕と爲すと言ふ、心の如くするの義は如何、と。曰はく、萬物の心は、便ち天地の心の如し。天下の心は、便ち聖人の心の如し。天地の萬物を生ずるや、一箇の物の裏面に便ち一箇の天地の心有り。聖人の天下に於けるや、一箇の人の裏面に便ち一箇の聖人の心有り。聖人の心は自然に到らざる所無く、此れ便是ち「乾道變化し、各性命を正す」にして、聖人の忠恕なり。「己の欲せざる所、人に施す勿かれ」は、便是ち己を推すの心、その物の上に做し到り、賢者の忠恕なり。この事、便是ち難し。且如へば古人の「困窮を廢せず、無告を虐げず」と云ふは、大いに無道の君に非ざるよりは、孰か肯へて之を廢虐する者ならん。然ども心力用ひてその上に到らざれば、便是ち自家之を廢虐す。聖人を須是ちて、方且めて會ず一處として到らざる無し、と。又問ふ、己を以て物に及ぼすは、仁なり。己を推して物に及ぼすは、恕なり。上句は是れ聖人の恕、下句は是れ賢者の恕なるや否や、と。曰はく、上箇は是れ聖人の恕、下箇は賢者の仁なり。聖人の恕は、便是ち衆人の仁なり。衆人の仁は、便是ち聖人の恕なり、と。【楊道夫】

口語訳

蜚卿（童伯雨）が質問した、「恕」の字について、先人の説には相違点があります。たとえば、「己の欲せざる所、人に施すなかれ」は、『大学』の「絜矩」と程頤のいう「己を推す」とに似ています。たとえば、程頤が引用する「乾道變化し、各^{おの}性命を正す」と『大学』（伝九章）の「諸を己に有して後に諸を人に求む」とは、「己を推す」との意味が通じ合いません。どうでしょうか」と。

（朱子が）言った、「やはり同じだ。しかし、「推己」と「如心」の対処法が別なのだ。よくよく見れば分かる。今の人はよく見ていなかったただけだ。わたしは以前これに似たような類は、みな一つ一つ書き出し、一字一字を見比べた。しばらくして紙上のもの（文字に書かれた意味）が通じ、心中のものも氷解した。例えば「乾道變化し、各性命を正す」は、それぞれの性命を正したものが、乾道の変化したもののようであり、恕なのだ」と。

直卿（黄榦）が質問した、「程子が「心の如くするを恕と為す」と言っていますが、「心の如くす」の意味はどういうことですか」と。

（朱子が）言った、「万物の心は、天地の心のようなものだ。天下の心は、聖人の心のようなものだ。天地が万物を生み出すと、物の中にそれぞれ天地の心があるのだ。聖人と天下（の人々と）の関係は、人間の内面にはそれぞれ天地の心があるのだ。聖人の心は自然に何事にも及ぶもので、これが「乾道變化し、各性命を正す」であり、聖人の忠恕なのだ。たとえば、「己の欲せざる所、人に施すなかれ」は、己を推す心が外物に作用するのであり、賢者の忠恕なのだ。この事からは難しい。たとえば、先人は「困窮を廃せず、無告を虐げず」と言っているが、ひどく無道の君主でなければ、誰が

進んで廢虐（非常に殘虐な行為）をしようか。しかし、心を外物に用いなければ、自ら廢虐をする。聖人であつて始めてどんな処にも至ることができよう」と。

さらに尋ねた、「程顥の）「己を以て物に及ぼすは、仁なり。己を推して物に及ぼすは、怨なり」の上の句は聖人の怨で、下の句は賢者の怨ですか」と。

（朱子が）言った、「上の句は聖人の怨であり、下の句は賢者の仁だ。聖人の怨は人々（衆人）の仁だ。人々の仁は、聖人の怨なのだ」と。【楊道夫録】

注

- (1) 蜚卿——「蜚卿」は、童伯雨。本訳注（六）の（里5・17）条に既出（その注（1）を参照）。
- (2) 己の欲：なかれ——『論語』衛靈公篇第二十三章に「子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。」とあり、集注に「推己及物、其施不窮、故可以終身行之」とある。
- (3) 大學の絜矩——『大學章句』伝十章に「所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍、是以君子有絜矩之道也」とある。
- (4) 程子の：を推す——集注に「盡己之謂忠、推己之謂恕。」と記されている程頤の語。また『河南程氏經說』卷六「論語解」里仁に「曾子曰、夫子之道、忠恕而已。盡己之謂忠、推己之謂恕。忠、體也。恕、用也。孟子曰、盡其心者、知其性也」とある。
- (5) 乾道變化：を正す——集注に「又曰、維天之命、於穆不已、忠也。乾道變化、各正性命、恕也。」と記されている程頤の語。また『論語精義』卷二下に「伊川曰、維天之命、於穆不已、忠也。乾道變化、各正性命、恕也。」とある。『河南程氏外書』卷七にも同文あり。
- (6) 諸を己：に求む——『大學章句』伝九章に「是故君子有諸己而后求諸人、無諸己而后非諸人」とある。
- (7) 對副す：別のみ——「對副」の語に対して、李宣哲著、李吟吳・鄭墜謨主編『標点校勘』朱子語類考文解義（一五三頁、成均館大學出版部、二〇一三年五月）に「謂彼此相對爲言者、各自不同。蓋絜矩是推己爲主、乾道變化、則以如心爲主、一則以推對副、一則以如對副、而其言各殊。然皆是自我及物之意、故曰只是一般」とあり、これに基づいて訳した。

(8) 直卿—「直卿」は、黃榦、字は直卿。本訳注(二二)の(里15・53)に既出(その注(2))を参照。

(9) 程子心…と爲す—『論語精義』卷二下に「又曰、夫子之道忠恕而已。盡己爲忠、如心爲恕、是乃所以爲一也。言仁義亦可也」と引用される程頤の語。「如心爲恕」は『詩経』周南「閔睢」小序の孔穎達疏に「於文中心爲忠、如心爲恕」とある。

(10) 困窮を…慮げず—『尚書』大禹謨に「帝曰、兪、允若茲、嘉言罔攸伏、野無遺賢、萬邦咸寧、稽于衆、舍己從人、不虐無告、不廢困窮、惟帝時克」とある。

(11) 己を以…恕なり—集注に「程子曰、以己及物、仁也。推己及物、恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之、忠者天道、恕者人道。忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用、大本達道也。此與違道不遠異者、動以天爾」と記されている。程頤の語。『河南程氏遺書』卷十一に「以己及物、仁也。推己及物、恕也。忠恕一以貫之。忠者天道、恕者人道。忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用、大本達道也。此與違道不遠異者、動以天耳」とあり、『遺書』では「忠恕一以貫之」の六字が割注になっている。

(12) 道夫—「道夫」は、楊道夫、字は仲思、または仲愚、建寧府浦城の人。記録者の一人である楊与立の従弟。『学案補遺』卷六十九、『門人』二七二頁、『年攷』一二四頁を参照。

〔里15・64／二七・一八〇〕

本文

楊問、以己推己之辨^①。先生反問、如何^②。曰、以己、是自然底意思。推己、是反思底意思。曰、然。以己、是自然流出、如孔子老者安之、朋友信之、少者懷之。推己、便有折轉意^③、如己欲立而立人、己欲達而達人。寓因問、推廣得去^④、則天地變化、草木蕃、推廣不去、天地閉、賢人隱。如何。曰、亦只推己以及物。推得去、則物我貫通、自有箇生生無窮底意思、便有天地變化、草木蕃氣象。天地只是這樣道理。若推不去、物我隔絕、欲利於己、不利於人。欲己之富、欲人之貧。欲己之壽、欲人之夭。似這氣象、全然閉塞隔絕了、便似天地閉、賢人隱。【寓】

校勘

- (1) 楊問、以…己之辨—「楊問、以己推己之辨」は、楠本本は「楊問忠恕明道言以己及物仁也推己及物恕也以己推己之辨何如」に作る。和刻本は「辨」を「辯」に作る。
- (2) 如何—「如何」は、楠本本は「公以爲如何」に作る。
- (3) 曰—「曰」は、楠本本は「答曰」に作る。
- (4) 曰—「曰」は、楠本本は「先生曰」に作る。
- (5) 便有折轉意—「便有折轉意」は、楠本本は「便有折轉意思」に作る。
- (6) 寓因問—「寓因問」は、楠本本は「寓因忠恕」に作る。
- (7) 推廣得去—「推廣得去」は、楠本本は「程子以推廣得去」に作る。

訓読

楊己を以てすと己を推すの辨を問ふ。先生は反りて問ふ、如何と。曰はく、己を以てすは、是れ自然底意思なり。己を推すは、是れ反思底意思なり、と。曰はく、然り、と。己を以てすとは、是れ自然に流れ出で、孔子の「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん」の如し。己を推すは、便ち折轉の意有り、「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して、人を達す」の如し。寓因りて問ふ、推し廣め得て去けば、則ち「天地變化して、草木蕃る」、推し廣め去かざれば、「天地閉ぢ、賢人隠る」、如何、と。曰はく、亦た只だ己を推して以て物に及ぼすのみ。推し得て去けば、則ち物我貫通し、自から箇の生生として窮まる無き底意思有り、便ち「天地變化して、草木蕃る」の氣象有り。天地は只是だ這の様な道理のみ。若し推し去かざれば、物我隔絶し、己を利用して、人を利せざらんと欲す。己の富を欲して、人の貧を欲す。己の壽を欲して、人の夭を欲す。這の氣象の似く、全然く閉塞隔絶し了はれば、便ち「天地閉ぢ、賢人

隠る」の似し、と。【徐禹⁴】

口語訳

楊が己を以て（物に及ぼす）ことと己を推して（物に及ぼす）こととの区別を尋ねた。

朱子は逆に尋ねた、「どうかね」と。

（楊が）答えた、「己を以て（物に及ぼす）ことは自然という意味であるが、己を推して（物に及ぼす）ことは意識的という意味である」と。

（朱子が）言った、「その通りである。己を以て（物に及ぼす）ことは自然に流れ出るのであり、孔子の「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん」と同じである。己を推して（物に及ぼす）ことは意味が転じて、「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して、人を達す」と同じである」と。

禹がそこで尋ねた、「（己を）押し広げていけば、「天地変化して、草木蕃る」のだ。（己を）押し広げていかなければ、「天地閉ち、賢人隠る³」というのは、どうでしょうか」と。

（朱子が）言った、「これもただ自己から他者へと意識的に推し及ぼしていくことである。推していけば、他者と自己とは貫通し、自から生々して窮まりないということになって、「天地変化して、草木蕃る」という状況になる。天地はこのような道理があるのだ。もし推していかなければ、他者と自己とが隔絶し、自分を利して、他人を利さないようにし、自分は富んで、他人は貧しくなるようにし、自分は長寿となり、他人は夭逝するよう望むことになる。このように完全に閉塞隔絶した状況になれば、それは「天地閉ち、賢人隠る」である」と。【徐禹録】

注

- (1) 老者は：懐けん―「老者安之、朋友信之、少者懷之」は、『論語』公冶長篇第二十五章に「顔淵季路侍。子曰、盍各言爾志。子路曰、願車馬衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾。顔淵曰、願無伐善、無施勞。子路曰、願聞子之志。子曰、老者安之、朋友信之、少者懷之」とある。
- (2) 己立た…を達す―「己欲立而立人、己欲達而達人」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(6)を参照)。
- (3) 推し廣…隠る―「推廣得去、則天地變化、草木蕃、推廣不去、天地閉、賢人隱」は、『周易』坤卦、文言伝に「天地變化、草木蕃、天地閉、賢人隱」とある。
- (4) 寓―徐寓は本訳注(1)の(里1・4)条に既出(その注(4)を参照)。

〔里15・65／二七・一八一〕

本文

問以己推己之辯^①。曰、以己、是自然。推己、是著力^②。己欲立而立人、己欲達而達人、是以己及人也。近取諸身、譬之他人、自家欲立、知得人亦欲立、方去扶持他使立。自家欲達、知得人亦欲達、方去扶持他使達。是推己及人也。【淳】

校勘

- (1) 問以己…己之辯―「問以己推己之辯」は、楠本本は「問以己及人爲仁推己及人爲恕何謂以己推己之辨」に作る。
- (2) 著―「著」は、和刻本は「着」に作る。

訓 読

己を以てすと己を推すとの辯を問ふ。曰はく、己を以てすは、是れ自然なり。己を推すは、是れ力を著くるなり。「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」^①とは、是れ己を以て人に及ぼすなり。「近く諸を身に取る」^②とは、之を他人に譬へて、自家^{みづか}ら立たんと欲するに、人も亦た立たんと欲するを知り得て、方めて去き他を扶持して立たしむ。自家^{みづか}ら達せんと欲するに、人も亦た達せんと欲するを知り得て、方めて去き他を扶持して達せしむ。是れ己を推して人に及ぼすなり、と。【陳淳^③】

口 語 訳

己を以て（物に及ぼす）ことと己を推して（物に及ぼす）こととの区別を尋ねた。

（朱子が）言った、「己を以て（物に及ぼす）とは自然なのであり、己を推して（物に及ぼす）とは努めて行うことである。「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」とは己を以て他人に及ぼすことであり、「近く諸を身に取る」とは（己を）他人に例えてみて、自分が立ちたいと思えば、他人もまた立ちたいと思うと分かつてこそ、他人を支えて立たせるのであり、自分が行き着きたいと思えば、他人もまた行き着きたいと思うと分かつてこそ、他人を支えて行き着かせるのである。これが己を推して他人に及ぼすということである」と。【陳淳録】

注

（1）己立た…を達す。―「己欲立而立人、己欲達而達人」は本訳注（二二）の（里15・57）条に既出（その注（6）を参照）。

- (2) 近く諸に取る。―「近取諸身」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(6)を参照)。
(3) 淳―「淳」は陳淳。陳淳は本訳注(一)の(里1・2)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・66／二七・一八二〕

本文

胡問以己及物以字之義^①。曰、以己及物、是大賢以上聖人之事。聖人是因我這裏有那意思^②、便去及人。如未饑、未見得天下之人饑。未寒、未見得天下之人寒。因我之饑寒、便見得天下之饑寒、自然恁地去及他、便是以己及物。如賢人以下、知得我既是要如此、想人亦要如此、而今不可不教他如此、三反五折、便是推己及物、只是爭箇自然與不自然^③。【義剛^④】

校勘

- (1) 胡問以…字之義―「胡問以己及物以字之義」は、楠本本は「胡問以己及物何謂以字之」に作る。
(2) 是―「是」は、楠本本は「亦是」の二字に作る。
(3) 只是爭…不自然―「只是爭箇自然與不自然」の十字、楠本本に無し。
(4) 義剛―「義剛」は、楠本本は「淳」(陳淳)に作る。

訓読

胡己を以て物に及ぼす^①の以字の義を問ふ。曰はく、己を以て物に及ぼすは、是れ大賢以上聖人の事なり。聖人は是れ我が這裏に那の意思有るに因れば、便ち去きて人に及ぼす。如し未だ饑ゑざれば、未だ天下の人の饑うるを見得せず。未だ

寒えざれば、未だ天下の人の寒ゆるを見得せず。我の饑寒に因れば、便ち天下の饑寒を見得し、自然に恁か地去く他に及ぼす、便是ち己を以て物に及ぼすなり。賢人以下の如きは、我既是に我の要もとむること此の如きを知り得て、人も亦た要むること此の如しと想ひ、而今は他をして此の如くならしめざる可からず、三反五折すれば、便是ち己を推して物に及ぼすなり、只是だ箇の自然と不自然とを争ふのみ。【義剛】

口語訳

胡が「己を以て物に及ぼす」の「以」字の意味について尋ねた。

(朱子が)言った、「己を以て物に及ぼす」とは大賢以上聖人のことである。聖人は自身に思いがあることによつて、他人に及ぼすのだ。自分が空腹でなければ、天下の人々が空腹であるとは思わないし、自分が寒くなければ、天下の人々が寒いとは思わない。自分が空腹で寒ければ、天下の人々が空腹で寒いことが分かり、自然にそのように他者に及ぼしてゆく、これが「己を以て物に及ぼす」ということである。賢人以下は、自分が求めていることはこうだと分かつてから、他人の求めていることもまたこうだろうと考える。今は他人にそうさせずにはいられず、あれこれ思案を巡らし、何度も何度も繰り返せば、これが「己を推して物に及ぼす」ということであり、つまりは、自然か不自然かの違いにほかならない。【黄義剛録】

注

(1) 己を以て及ぼす。―「以己及物」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。

(2) 義剛―「義剛」は黄義剛。本訳注(九)の(里6・9)条に既出(その注(3)を参照)。楠本本記載の「淳」は、陳淳。本訳注(一)の(里1・2)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・67／二七・一八三〕

本文

以己及物、是自然及物。己欲立、便立人、己欲達、便達人。推己及物、則是要逐一去推出。如我欲恁地、便去推與人也合恁地、方始有以及之。如喫飯相似、以己及物底、便是我要喫、自是教別人也喫、不待思量。推己及物底、便是我喫飯、思量道別人也合當喫、方始與人喫。【義剛】

校勘

(1) 楠本本「子曰參乎章」にはない。

訓読

己を以て物に及ぼす^①は、是れ自然に物に及ぼす。「己立たんと欲せば、便ち人を立て、己達せんと欲せば、便ち人を達す^②」るなり。己を推して物に及ぼすは、則ち是れ逐一去きて推し出ださんと要す。もし我恁^{かくのど}地くせんと欲すれば、便ち去き推し人の與^{ため}に也^また合^まに恁地くすべくして、方始^{はじ}めて以て之に及ぼす有り。飯を喫^{くち}ふが如く相ひ似て、己を以て物に及ぼす底^{もの}は、便是ち我喫はんと要すれば、自是^{おのづ}から別人をして也た合^ま當^まに喫ふべしと道^いひて、方始^{はじ}めて人の與^{ため}に喫はしむ。【黄義

口語訳

「己を以て物に及ぼす」とは、自然と他者に及ぼすことである。「己立たんと欲せば、便ち人を立て、己達せんと欲せば、便ち人を達す」である。「己を推して物に及ぼす」とは、一つ一つ事に推し及ぼすことである。たとえば自分がこうしたければ、推して他人にもまたそうするべきであり、そうしてはじめて他人に及ぼすことになる。飯を食べるようなもので、「己を以て物に及ぼす」のは、自分が食べようとするときに、自然と他人にも食べさせてやろうとし、思慮するまでもない。「己を推して物に及ぼす」のは、自分が飯を食べようとするとき、他人も飯を食べたいはずと思慮してから、その後で他人に飯を食べさせるのである。【黄義剛録】

注

- (1) 己を以て及ぼす―「以己及物」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
 (2) 己立た…を達す―「己欲立、便立人、己欲達、便達人」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(6)を参照)。
 (3) 義剛―「義剛」は黄義剛。本訳注(九)の(里6・9)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・68／二七・一八四〕^①

本文

恕之得名、只是推己。故程先生只云、推己之謂恕。曾子言、夫子之道忠恕。此就聖人說、却只是自然、不待勉強而推之。其字釋却一般。【端蒙】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

恕の名を得たるは、只是だ己を推すのみ。故に程先生は只だ己を推すを之れ恕と謂ふと云ふのみ。曾子言ふ、「夫子の道は忠恕のみ」と。此れ聖人に就きて説き、却て只是だ自然にして、勉強めて之を推すを待たず。其の字は釋くこと却て一般なり。【程端蒙】

口語訳

恕という言葉は、自己を推すことに他ならない。だから、程先生もただ「己を推すを之れ恕と謂ふ」と言うだけだった。曾子は「夫子の道は忠恕のみ」と言った。これは聖人について言ったのであり、自然なのであり、努めて推し及ぼす必要がない。(恕)字の解釈は同じである。【程端蒙録】

注

(1) 故に程……ふのみ―「故程先生只云、推己之謂恕」は、本訳注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(4)を参照)。「論語精義」にもこの個所が引用されている。なお『集注』は「忠」と「恕」の定義に程頤「盡己之謂忠、推己之謂恕」を踏襲する。

(2) 端蒙―「端蒙」は程端蒙。本訳注(六)の(里5・14)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・69／二七・一八五〕⁽¹⁾

本文

以己及物仁也、一以貫之是也。推己及物恕也、違道不遠是也、蓋是明道之說。第一句只是架空說一句。違道不遠、只粘著⁽²⁾推己及物說。【夔孫】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

(2) 著―「著」は、正中書局本・和刻本は「着」に作る。

訓読

己を以て物に及ぼすは仁なりとは、⁽¹⁾「一以て之を貫く」是れなり。己を推して物に及ぼすは恕なりとは、「道を違ること遠からず」⁽²⁾是れなり、蓋し是れ明道の說なり。第一句は只是^た架空に一句を説くのみ。「道を違ること遠からず」は、只だ己を推して物に及ぼすに粘り著けて説くのみ。【林夔孫⁽³⁾】

口語訳

「己を以て物に及ぼすは仁なり」とは、「一以て之を貫く」である。「己を推して物に及ぼすは恕なり」とは、「道を違ること遠からず」である。思うに、これらは程明道が説いたことである。第一句目は机上の句として説いているだけあり、「道を違ること遠からず」は、ただ「己を推して物に及ぼす」にくつつけて説いたのである。【林夔孫録】

注

- (1) 己を以て仁なり―「以己及物仁也」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
(2) 己を推してからず―「推己及物恕也」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。「違道不遠」は、『中庸章句』第十三章に「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人」とある。
(3) 夔孫―「夔孫」は林夔孫。本訳注(九)の(里6・7)条に既出(その注(6)を参照)。

【里15・70／二七・一八六¹】

本文

問、程子謂、以己及物仁也。推己及物恕也、違道不遠是也。以己及物仁也、與違道不遠、不相關。莫只是以此分別仁恕否。
曰、自是不相關、只是以此形容仁恕之定名。【子蒙】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

問ふ、程子謂ふ、己を以て物に及ぼすは仁なり。己を推して物に及ぼすは恕なりとは、「道を違ること遠からず」是れなり、と。「己を以て物に及ぼすは仁なり」と「道を違ること遠からず」とは、相ひ關せず。只是だ此を以て仁恕を分別する莫きや否や、と。曰はく、自是から相ひ關せず、只是だ此を以て仁恕の名を定むるを形容す、と。【林子蒙⁽³⁾】

口語訳

弟子が尋ねた、「程子の言う「己を以て物に及ぼすは仁なり。己を推して物に及ぼすは恕なりとは、「道を違ること遠からず」是れなり」と。「己を以て物に及ぼすは仁なり」ということと「道を違ること遠からず」ということとは、關連がない。これだけでは仁と恕とを区別しないのではありませんか」と。

朱子が答えた、「もちろん關連がない。それで仁恕の概念を表しただけということだ」と。【林子蒙録】

注

- (1) 程子謂：恕なり―「程子謂、以己及物仁也。推己及物恕也」は、本訳注(二二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
(2) 道を違：からず―「違道不遠」は、本訳注(二二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
(3) 子蒙―「子蒙」は林子蒙。名諱は未詳。湖南の人。『学案補遺』卷六九、『門人』一四三、『年攷』一五九頁を参照。

「里15・71／二七・一八七」

本文

問、明道言、忠者天道、恕者人道。何也。曰、忠是自然。恕隨事應接^①、略假人爲、所以有夫人之辯^②。【莊祖^③】

校勘

(1) 恕隨事應接―「恕隨事應接」は、楠本本は「恕是隨事應接」に作る。

(2) 辯―「辯」は、正中書局本は「辨」に作る。

(3) 莊祖―「莊祖」は、楠本本は「處謙」に作る。

訓読

問ふ、明道言ふ、忠とは天道なり、恕とは人道なり^①、と。何ぞや、と。曰はく、忠は是れ自然なり。恕は事に隨ひて應接し、略^ほぼ人爲に假^より、天人の辯有る所以なり、と。【李莊祖^②】

口語訳

(弟子が) 尋ねた、「程顥(明道)が「忠とは天道であり、恕とは人道である」と言ったのは、どういうことですか」と。(朱子が) 答えた、「忠とは自然である。恕とは事物に対応することであり、概ね人爲にたよる。天と人とに区分がある

のである」と。【李莊祖録】

注

(1) 明道言：道なり。「明道言、忠者天道、恕者人道」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
(2) 莊祖「莊祖」は李莊祖。字は處謙。本訳注(三)の(里2・4)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・72／二七・一八八〕

本文

忠者天道、恕者人道、此天是與人對之天。若動以天也之天、即是理之自然。又曰、聖賢之言、夫子言一貫、曾子言忠恕、子思言小德川流、大德敦化、張子言理一分殊。只是一箇。【卓】

校勘

(1) 是「是」は、楠本本は「却」に作る。
(2) 敦「敦」は、楠本本は「弘」に作る。

訓読

忠とは天道なり、恕とは人道なり、と。此の天は是れ人と對するの天なり。動くに天を以てするなりの天の若きは、即是ち理の自然なり、と。又曰はく、聖賢の言、夫子は一貫と言ひ、曾子は忠恕と言ひ、子思は「小徳は川流し、大徳は敦化

す」と言ひ、張子は「理一分殊^②」と言ふ。只是だ一箇のみ、と。【黃卓^③】

口語訳

「忠は天道であり、恕は人道である」と。この天は人間と対になる天である。たとえば「動くに天を以てす」の天は、理の自然である」と。

(朱子が) また言った、「聖人や賢者の言葉として、孔子は一貫と言ひ、曾子は忠恕と言ひ、子思は「小徳は川流し、大徳は敦化す」と言ひ、張子は理一分殊と言った。(道理は) ただ一つだけである」と。【黃卓録】

注

- (1) 動くに：若きは―「忠者天道、恕者人道。……動以天爾」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
(2) 理一分殊―この語は、もとより張載の「乾稱父、坤稱母、予茲藐焉、乃混然中處。故天地之塞、吾其體、天地之帥、吾其性。民吾同胞、物吾與也」(『正蒙』乾稱篇)の説に関する楊時の質問に対して、程伊川の返答の中に見られる語である。「西銘之爲書、推理以存義、擴前聖所未發、與孟子性善養氣之論同功、豈墨氏之比哉。西銘明理一而分殊、墨氏則二本而無分。分殊之蔽、私勝而失仁、無分之罪、兼愛而無義。分立而推理一、以止私勝之流、仁之方也。無別而迷兼愛、至於無父之極、義之賊也」(『河南程氏文集』卷九)
(3) 卓―「卓」は黃卓。本訳注(二二)の(里15・60)条に既出(その注(1)を参照)。

〔里15・73／二七・一八九〕

本文

問、天道人道⁽¹⁾、初非以優劣言。自其渾然一本言之、則謂之天道、自其與物接者言之、則謂之人道耳。曰、然。此與誠者天之道、誠之者人之道、語意自不同。【閔祖】

校勘

(1) 問、天道人道——「問、天道人道」は、楠本本は「問明道所謂天道人道」に作る。

訓読

問ふ、天道人道は、初めより優劣を以て言ふに非ず。其の渾然として一本より之を言へば、則ち之を天道と謂ひ、其の物と接する者より之を言へば、則ち之を人道と謂ふのみ、と。曰はく、然り、と。此れ「誠なる者は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」⁽¹⁾と、語意は自^{おのり}から同じからず、と。【李閔祖⁽²⁾】

口語訳

(弟子が) 尋ねた、「天道と人道とは最初から優劣で論じてはいない。渾然一体ということから言えば、天道と言えし、事物と応接することから言えば、人道と言うだけのことである」と。

(朱子が) 答えた、「その通りである。このことと「誠なる者は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」ということとは、意味がむろん異なっている」と。【李閔祖録】

注

- (1) 誠なる…道なり―「誠者天之道、誠之者人之道」は『中庸章句』第二十一章に「誠者天之道也、誠之者人之道也。誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也」とある。
- (2) 閔祖―「閔祖」は李閔祖。本訳注(二七)の(里12・2)条に既出(その注(1)を参照)。弟の李相祖(時可)・李莊祖(處謙)も朱子に師事する。

〔里15・74／二七・一九〇〕^①

本文

一貫忠恕。先生曰、此是曾子平日用工、於逐事逐物上、都理會過了、但未知一貫爾、故夫子喚醒他。忠者天道、恕者人道。忠者無妄、恕者所以行乎忠也。先生顧曰、恕者所以行乎忠也一句好看。又曰、便與中庸大德敦化、小德川流相似。【炎】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

一貫は忠恕なり、と。先生曰はく、此は是れ曾子は平日用工を用ひて、逐事逐物の上に於て、都て理會し過ぎ了はるも、但だ未だ一貫するを知らざるのみ、故に夫子は他を喚び醒ましむ、と。忠は天道なり、恕は人道なり。忠は無妄、恕は忠を行ふ所以なり、^①と。先生顧みて曰はく、恕は忠を行ふ所以なり、の一句は、好看よ、と。又曰はく、便ち中庸の「大

徳は敦化し、小徳は川流す」と相ひ似たり、と。【劉炎^③】

口語訳

一貫とは忠恕である、と。

先生が言った、「これは曾子が日頃勉強に励み、一つ一つの物事に関して、よく理解していたが、一貫に理解が至らなかつただけなので、孔子は曾子に気づかせようとしたのである」と。

「忠は天道であり、恕は人道である。忠は無妄であり、恕は忠を實行する根拠である」と。

先生が（弟子を）見て言った、「恕は忠を實行する根拠である」の句をしつかり読みなさい」と。

さらに言った、「『中庸』の「大徳は敦化し、小徳は川流す」と似通っている」と。【劉炎録】

注

(1) 忠とは：以なり―「忠者天：乎忠也」は、集注に圏外の説として引く程顥の語。本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。

(2) 大徳は：川流す―「大徳敦：徳川流」は、『中庸章句』第三十章に「萬物竝育而不相害。道竝行而不相悖。小徳川流、大徳敦化。此天地之所以爲大也」とあり、引用は顛倒する。

(3) 炎―「炎」は劉炎。本訳注(三三)の(里2・4)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・75／二七・一九〕^①

本文

忠者、盡己之心、無少僞妄。以其必於此而本焉、故曰道之體。恕者、推己及物、各得所欲。以其必由是而之焉、故曰道之用。【端蒙】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

忠は、己を盡くすの心なり、⁽¹⁾少しの僞妄も無し。其の必ず此に於て焉に本づくを以ての故に道の體と曰ふ。恕は、己を推して物に及ぼし、⁽²⁾各^{おのづか}欲する所を得しむ。其の必ず是に由りて焉に之^ゆを以ての故に道の用と曰ふ。【程端蒙⁽⁴⁾】

口語訳

忠は己を尽くす心であり、わずかな偽りもなく、常に忠に於て忠に基づく故に道の本体と言う。恕は己を推して物に及ぼし、各自が望むものを得て、常に恕によつて進んでいく故に道の作用と言う。【程端蒙録】

注

(1) 忠は、己…心なり―「忠者、盡…己之心」は、集注に引く程頤の語。本訳注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(4)を参

照)。

(2) 恕は、己…及ぼし―「恕者、推…己及物」は、集注に圈外の説として引く程顥の語。本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。

(3) 道の體：道之用―「道之體：道之用」は、『中庸章句』第一章の朱注に「大本者、天命之性、天下之理皆由此出。道之體也。達道者、循性之謂、天下古今之所共由。道之用也。此言性情之德、以明道不可離之意」とある。

(4) 端蒙―「端蒙」は程端蒙。本訳注(6)の(里5・14)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・76／二七・一九二〕⁽¹⁾

本文

忠恕一段、明道解得極分明。其曰以己及物、仁也。推己及物、恕也。忠恕違道不遠是也、分明自作一截説。下面忠恕一貫之以下、却是言聖人之忠恕。故結云、所以與違道不遠異者、動以天爾。若曰、中庸之言、則動以人爾。【端蒙】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

忠恕の一段は、明道解き得て極めて分明^{あき}らかなり。其の己を以て物に及ぼすは、仁なり。己を推して物に及ぼすは、恕なり。⁽¹⁾「忠恕は道^きを違^さること遠^{とほ}からず⁽²⁾」は是^ぜなりと曰ふは、分明らかに自ら^{みづか}一截の説を作す。下面の忠恕一貫之⁽³⁾以下は、

却^{かへ}て聖人の忠恕を言ふ。故に結びて云ふ「道を違ること遠からず」と異なる所以の者は、動くに天を以てするのみ、と。中庸の言は、則ち動くに人を以てするのみと曰ふが若^{ごと}し。【程端蒙⁴】

口語訳

忠恕の一条は、程明道が非常にはつきり解き明かしている。「己を以て物に及ぼすは、仁なり。己を推して物に及ぼすは、恕なり。「忠恕は道を違ること遠からず」は正しい」と言うのは、明確に一家言を立てている。下文の「忠恕一貫之」以下は、聖人の忠恕を言っている。したがって、最後に「道を違ること遠からず」と違う理由は、天に則って動くだけである」と言うのは、『中庸』の言葉は、人に則って動くだけだ」と言っているようなものだ。【程端蒙録】

注

- (1) 其の己：恕なり―「己及：物、恕也」は、集注に圈外の説として引く程顥の語。本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
- (2) 忠恕は：からず―「忠恕違道不遠」は、本訳注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
- (3) 忠恕一貫之以下―「忠恕一貫之以下」は、集注に圈外の説として引く程顥の語。本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。ただし、『論語精義』及び『集注』は「忠恕一以貫之」に作る。
- (4) 端蒙―「端蒙」は程端蒙。本訳注(六)の(里5・14)条に既出(その注(3)を参照)。

本文

忠恕違道不遠、此乃掠⁽¹⁾下教人之意。下學而上達也。盡己之謂忠、推己及物之謂恕。忠恕二字之義、只當如此說。曾子說夫子之道、而以忠恕爲言、乃是借此二字綻出一貫。一貫乃聖人公共道理、盡己推己不足以言之。緣一貫之道、難說與學者、故以忠恕曉之。【賀孫】

校勘

(1) 掠——「掠」は、楠本本・和刻本ともに「略」に作る。

訓読

「忠恕は道を違^まること遠からず⁽¹⁾」と。此れ乃ち下を掠めて人に教ふるの意⁽²⁾。「下學して上達す⁽³⁾」なり。「己を盡くすを之れ忠と謂ひ、己を推し物に及ぼすを之れ恕と謂ふ⁽⁴⁾」と。忠恕の二字の義は、只だ當に此の如く説くべし。曾子夫子の道を説きて、忠恕を以て言を爲す、乃ち是れ此の二字を借りて一貫を綻出す。一貫は乃ち聖人の公共の道理にして、己を盡くし己を推すは以て之を言ふに足らず。一貫の道は、學ぶ者に説き與へ難きに縁^より、故に忠恕を以て之を曉らしむ。【葉賀孫⁽⁵⁾】

口語訳

「忠恕は道を違ること遠からず」と。この言葉は下等なことを盗み用いて人に教えた意味である。「下學して上達す」で

ある。「己を尽くすを之れ忠と謂ひ、己を推し物に及ぼすを之れ恕と謂ふ」と。忠恕の二字の意味は、ただこのように説くべきだ。曾子が夫子の道を説いて、忠恕を用いて言ったのは、この二字を借りて一貫を結びさせた。一貫は聖人の公共の道理であつて、「己を尽くし」「己を推す」では言葉足らずである。一貫の道は、学ぶ者に説き伝えるのが難しいために、忠恕を用いて分からせようとしたのだ。【葉賀孫録】

注

- (1) 忠恕は：からず―「忠恕違道不遠」は、本訳注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
(2) 下を掠：意なり―「掠下教人之意」は、『論語精義』卷二下、伊川解に「又曰、中庸以曾子之言雖是如此、又恐人尚疑忠恕未可使爲道、故曰、忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人、此又掠下教人」とある。「掠下教人」を口語訳にするにあたり、『考文解義』【略下教人】畧、本作掠、二字通用、掠、擷取之義、謂掠取下等之事以教人、非聖人自然之忠恕也(二五三頁)の説に基づき口語訳にした。
(3) 下學し：上達す―「下學而上達也」は、『論語』憲問篇第三十七章に「子曰、莫我知也夫。子貢曰、何爲其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎」とある。
(4) 己を盡：と謂ふ―「盡己之之謂恕」は、集注に引く程頤の語。本訳注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(4)を参照)。
(5) 賀孫―「賀孫」は葉賀孫。本訳注(里1・3)条に既出(その(4)を参照)。

〔里15・78／二七・一九四〕¹

本文

忠恕違道不遠與夫子之道忠恕、只消看他上下文、便自可見。如中庸施諸己而不願、亦勿施諸人、勿者、禁止之辭、豈非學

者之事。論語之言、分明先有箇夫子之道字、豈非聖人之事。【端蒙】

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

「忠恕は道を違ること遠からず」と「夫子の道は忠恕」とは、只だ他の上下の文を見るを消ふれば、便すなはち見ゆる可し。中庸の「諸を己に施して願はざれば、亦た諸を人に施すこと勿かれ」の如く、勿なる者は、禁止の辭なり。豈に學者の事に非ずや。論語の言は、分明あきらかに先づ箇の「夫子の道」の字有り、豈に聖人の事に非ずや。【程端蒙⁽²⁾】

口語訳

「忠恕は道を違ること遠からず」と「夫子の道は忠恕」とは、上下の文脈を読み取ろうとすれば、すぐに理解できる。「中庸」の「諸を己に施して願はざれば、亦た諸を人に施すこと勿かれ」というのは、「勿」とは禁止の語であり、学まなぶ者のことではないか。『論語』の言葉には、はっきりとまず「夫子の道」という語があり、聖人のことではないか。【程端蒙録】

注

(1) 忠恕は：勿かれ―「忠恕違道不遠」「施諸己：施諸人」は、本訳注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
(2) 端蒙―「端蒙」は程端蒙。本訳注(六)の(里5・14)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・79／二七・一九五〕^①

本文

忠恕違道不遠、正是說忠恕。一以貫之之忠恕、却是昇一等說。【高】^②

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。
(2) 高―「高」は、和刻本は「寓」に作る。

訓読

「忠恕は道を違ること遠からず」^①とは、正是に忠恕を説く。「一以て之を貫く」の忠恕は、却是て一等を昇りて説く。【高】^②

口語訳

「忠恕は道を違ること遠からず」とは、まさしく忠恕を説いている。「一以て之を貫く」の忠恕とは、一ランク上がったて

説いたものである。【舒高録】

注

- (1) 忠恕は：「からず」「忠恕違道不遠」は、本訳注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
(2) 高―「高」は舒高。字や出身地は不明。『宋元学案補遺』六十九、『朱子門人』二二七頁。和刻本記載の「萬」は、徐萬。本訳注(二)の(里1・4)条に既出(その注(4)を参照)。

〔里15・80／二七・一九六〕

本文

一^①是忠、貫是恕。譬如一泓水、聖人自然流出、灌漑百物、其他人須是推出來灌漑。此一貫所以爲天。至子思忠恕、只是人、所以說違道不遠。盡己之謂忠、推己之謂恕。才^②是他人、便須是如此。【泳】

校勘

- (1) 一―「一」は、楠本本は「曾子忠恕一是忠」に作る。
(2) 才―「才」は、楠本本は「纔」に作る。

訓読

一は是れ忠なり、貫は是れ恕なり。譬如^{たと}へば一泓の水の、聖人は自然に流れ出で、百物を灌漑す。其れ他人は須^{すべ}是^からく推

し出だし来りて灌漑すべし。此れ一貫の天と爲す所以なり。子思の忠恕に至りては、只是だ人のみなれば、所以に「道を違ること遠からず」と説く。「己を盡くすを之れ忠と謂ひ、己を推すを之れ恕と謂ふ」と。才是かに他人なれば、便ち須是らく此の如くなるべし。【湯泳^③】

口語訳

一とは忠であり、貫とは恕である。例えば一本の川のようなものであり、聖人は自然に流れてゆき、万物を潤す。聖人以外の間人は水を推し出して潤さなくてはならない。これが一貫が天である理由である。子思の忠恕に到っては、普通の人間なので、「道を違ること遠からず」と説いたのである。「己を盡くすを之れ忠と謂ひ、己を推すを之れ恕と謂ふ」と。聖人以外の人間なら、そうあるべきである。【湯泳録】

注

- (1) 道を違：からず―「違道不遠」は、本記注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
- (2) 己を盡：と謂ふ―「尽己之之謂恕」は、集注に引く程頤の語。本記注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(4)を参照)。
- (3) 泳―「泳」は湯泳。字は叔永。静一先生と称される。丹陽(江蘇)の人。『宋元学案補遺』卷六十九、『朱子門人』二二九九頁。三浦國雄『朱子語類』抄』に「なお、泳という名の弟子は胡泳のほかは湯泳があり、『語類』の記録者名は名だけ書くならわしたが、両者を区別するために胡泳が記録者の場合に限ってフルネームで書く。」と記している。(九五頁、講談社学術文庫、二〇〇八年十月)

本文

問、到得忠恕、已是道。如何又云違道不遠。曰、仁是道、忠恕正是學者著力下工夫處。施諸己而不願、亦勿施於人、子思之說、正爲下工夫。夫子之道、忠恕而已矣、却不是恁地。曾子只是借這箇說。維天之命、於穆不已、乾道變化、各正性命、便是天之忠恕。純亦不已、萬物各得其所、便是聖人之忠恕。施諸己而不願、亦勿施於人、便是學者之忠恕。【賀孫】

校勘

(1) 道—「道」は、和刻本は「到」に作る。

(2) 著—「著」は、楠本本・和刻本・正中書局本は「着」に作る。

訓読

問ふ、忠恕に到り得れば、已に是れ道なり。如何ぞ又「道を違ること遠からず」と云ふや、と。曰はく、仁は是れ道なり、忠恕は正に是れ學者の著力して工夫を下す處なり。「諸を己に施して願はざれば、亦た人に施すこと勿かれ」⁽¹⁾は、子思の説くことは、正に工夫を下すと爲す。「夫子の道は、忠恕のみ」⁽²⁾は、却是て恁地にあらず。曾子は只是だ這箇を借りて説く。「維れ天の命、於穆として已まず」⁽³⁾、「乾道の變化は、各性命を正す」⁽³⁾は、便是ち天の忠恕なり。「純も亦た已まず」⁽⁴⁾、「萬物各其の所を得たり」⁽⁵⁾は、便是ち聖人の忠恕なり。「諸を己に施して願はざれば、亦た人に施すこと勿かれ」は、便是ち學者の忠恕なり、と。【葉賀孫】

口語訳

(弟子が) 尋ねた、「忠恕に到達したならば、もうそれで道である。さらに「道を違ること遠からず」と言うのはなぜですか」と。

(朱子が) 答えた、「仁とは道である。忠恕とは、まさしく学ぶ者が努めて工夫を行うことである。「諸を己に施して願はざれば、亦た人に施すこと勿かれ」は、子思が説いたのは、まさしく工夫を行うことである。「夫子の道は、忠恕のみ」は、そうではない。曾子はただこの忠恕を借りて説いた。「維れ天の命、於穆として已まず」と「乾道の変化は各性命を正す」は、天の忠恕である。「純も亦た已まず」と「万物各其所を得たり」は、聖人の忠恕である。「諸を己に施して願はざれば、亦た人に施すこと勿かれ」は、学ぶ者の忠恕である」と。【葉賀孫録】

注

- (1) 道を違：勿かれ―「違道不遠」「施諸己而不願、亦勿施於人」は、本訳注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2))を参照。
- (2) 維れ天：已まず―「維天之：穆不已」は、『詩経』周頌・維天之命に「維天之命、於穆不已。於乎不顯、文王之德之純。假以溢我、我其收之。駿惠我文王、曾孫篤之」とある。
- (3) 「乾道の…を正す」―「乾道變：正性命」は、本訳注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(5))を参照。
- (4) 純も亦：已まず―「純亦不已」は、『中庸章句』第二十六章に「詩云、維天之命、於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯、文王之德之純。蓋曰文王之所以爲文也、純亦不已」とある。
- (5) 萬物各：得たり―「萬物各得其所」は、『周易』繫辭下伝に「日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、蓋取諸噬嗑」とある。

〔里15・82／二七・一九八〕

本文

曾子忠恕、與子思忠恕不同。曾子忠恕是天、子思忠恕尚是人在。【泳】

訓讀

曾子の忠恕は、子思の忠恕と同じからず。曾子の忠恕は是れ天なり、子思の忠恕は尚ほ是れ人在り。【湯泳^①】

口語訳

曾子の忠恕は子思の忠恕とは同じではない。曾子の忠恕は天である。子思の忠恕はまだ人である。【湯泳録】

注

(1) 泳―「泳」は湯泳。本訳注(二三)の(里15・80)条に既出(その注(3)を参照)。

〔里15・83／二七・一九九〕

本文

問、忠恕而已矣、與違道不遠、己所不欲等處不同、而程先生解釋各有異意、如何。曰、先理会忠恕而已一句。如明道說動以天之類、只是言聖人不待勉強、有箇自然底意思。如己所不欲、勿施於人、施諸己而不願、亦勿施諸人、看箇勿字、便是禁止之辭。故明道曰、以己及物仁也、推己及物恕也。正是如此分別。或曰、南軒解此云、聖人全乎此、天之道也、曾子稱夫子忠恕是矣。賢者求盡夫此、人之道也、子思稱忠恕是矣。曰、此亦說得好。諸友却如何看。謨曰、集注等書所謂盡己爲忠道之體也。推己爲恕道之用也。忠爲恕體、是以分殊而理未嘗不一。恕爲忠用、是以理一而分未嘗不殊。此固甚明矣。曰、夫子只說吾道一以貫之、曾子說此一句、正是下箇注脚、如何却橫將忠恕入來解說一貫字。程子解此又如何。曰、以己及物爲仁、推己及物爲恕。又却繼之曰、此與違道不遠異者、動以天爾。如此、却是剩了以己及物一句、如何。謨曰、莫是合忠恕而言便是仁否。先生稱善。謨曰、只於集注解第二節處得之。如曰聖人至誠無息、而萬物各得其所便是合忠恕是仁底意思。曰、合忠恕正是仁。若使曾子便將仁解一貫字、却失了體用、不得謂之一貫爾。要如此講貫、方盡。【謨】

校勘

- (1) 問—「問」は、楠本本は「謨問」に作る。
- (2) 看箇—「看箇」は、楠本本は「着個」に作る。
- (3) 曰—「曰」は、楠本本は「先生曰」に作る。
- (4) 謨—「謨」は、楠本本は「某」に作る。
- (5) 曰—「曰」は、楠本本は「先生曰」に作る。
- (6) 句—「句」は、和刻本は「句」の字無し。
- (7) 正—「正」は、和刻本は「自正」に作る。
- (8) 箇—「箇」は、楠本本は「個」に作る。

- (9) 謨―「謨」は、楠本本は「某」に作る。
 (10) 曰―「曰」は、楠本本は「先生曰」に作る。
 (11) 要―「要」は、楠本本は「要」の字無し。

訓 読

問ふ、「忠恕のみ」と「道を違ふこと遠からず」「己の欲せざる所」等の處とは、同じからずして、程先生の解釋は各異おのおのなる意有るは、如何、と。曰はく、先づ「忠恕のみ」の一句を理會せよ。明道の動くに天を以てすと説くの類の如きは、只是だ聖人は勉強つとむむるを待たず、箇の自然底意思有るを言ふのみ。「己の施せざる所、人に施すこと勿かれ」、諸を己に施して願はざれば、亦た人に施すこと勿かれ」の如きは、箇の勿の字を看れば、便ち是れ禁止の辭なり。故に明道曰はく、己を以て物に及ぼすは仁なり、己を推して物に及ぼすは恕なり、と。正に是れ此の如く分別す、と。或ひと曰はく、南軒は此を解して云ふ、聖人の此に全きは、天の道なればなり、曾子の夫子を忠恕と稱す是れなり。賢者の此に求め盡くすは、人の道なればなり、子思の忠恕と稱す是れなり、と。曰はく、此れ亦た説き得て好し。諸友は却て如何に看るか、と。謨曰はく、集注等の書に所謂「己を盡くすを忠と爲す、とは、道の體なり。己を推すを恕と爲す、とは、道の用なり。」忠は恕の體爲り、是を以て分殊にして理未だ嘗て一ならずんばならず。恕は忠の用爲り、是を以て理一にして分未だ嘗て殊ならずんばならず。此れ固より甚だ明らかなり、と。曰はく、夫子は只だ「吾が道は一以て之を貫く」と説くのみ。曾子の此の一句を説くは、正に是れ下の箇の注脚なれば、如何ぞ却て横よこしまに忠恕を將もち入れ來りて「一貫」の字を解き説かん。程子の此を解くこと又如何、と。曰はく、己を以て物に及ぼすを仁と爲し、己を推して物に及ぼすを恕と爲す、と。又

却て之を繼ぎて曰はく、此れと「道を違ること遠からず」との異なる者は、動くに天を以てするのみ、と。此の如くんば、却て「己を以て物に及ぼす」の一句を剩し了はるは、如何、と。謨曰はく、是れ忠恕に合して言へば、便ち是れ仁なる莫きや否や、と。先生善しと稱す。謨曰はく、只だ集注の第二節を解する處に於て之を得たり。如し聖人は至誠にして息むこと無く、萬物各其の所を得と曰へば、便是ち忠恕に合す、是れ仁底意思なり、と。曰はく、忠恕に合するは、正に是れ仁なり。若し曾子の便ち仁を將て一貫の字を解すれば、却て體用を失ひ了はり、之を一貫と謂ふを得ざるのみ。要し此の如く貫を講ずれば、方めて盡くせり、と。【周謨】

口語訳

(弟子が) 尋ねた、「忠恕のみ」と「道を違ること遠からず」、「己の欲せざる所」等には違いがあり、程子の解釈にはそれぞれ違いがあるのは、どういうことでしょうか」と。

(朱子が) 答えた、「まず「忠恕のみ」という句を理解せよ。程明道が「動くに天を以てす」という類のごときは、聖人だけが努力を待たないことを言い、自然のままという意味がある。「己の施せざる所、人に施す勿かれ」、「諸を己に施して願はざること、亦た人に施す勿かれ」の「勿」という字を見れば、これは禁止の語である。だから、程明道は「己を以て物に及ぼすは仁なり、己を推して物に及ぼすは恕なり」と言った。まさしくこのように区別する」と。

ある弟子が言った、「張南軒は解釈して言った、「聖人が完全なのは、天の道だからである。曾子は夫子の道を忠恕と称したのが、それである。賢者が追求していくのは、人の道だからである。子思が忠恕と称したのが、それである」と」と。(朱子が) 答えた、「これもうまい言い方である。君たちはどう思うかね」と。

私(謨)は言った、「『集注』などの書物でいう「己を尽くすを忠と為す」は道の本体であり、「己を推すを恕と為す」は道の作用である。忠は恕の本体である、それゆえ分殊であっても、理一でなかったことはない。恕は忠の作用である、それゆえ理一であるが、分殊でなかったことはない。以上のことはとても明らかなことだ」と。

(朱子が)言った、「孔子は「吾が道は一以て之を貫く」と言っただけである。曾子の一句は、正に下に続いた注釈である。どうしてむやみに忠恕を挿入して一貫の字を説明するのだろうか。程子の説明は、どういうことだろうか」と。

(朱子が)言った、「己を以て物に及ぼすを仁と為し、己を推して物に及ぼすを恕と為す」と。それに続けて言っている、「此れと」道を変えること遠からず」との異なるものは、動くに天を以てするのみ」と。そうならば、「己を以て物に及ぼす」の句が余計になってしまいが、どうであろうか」と。

私(謨)は言った、「忠恕に合して言えば、仁ではないのでしょうか」と。
先生は良いと評した。

私(謨)は言った、「『集注』で第二節を解釈したのは当を得ています。「聖人は至誠にして息むこと無く、万物各其の所を得」は、忠恕に合することで、仁であるという意味です」と。

(朱子が)言った、「忠恕に合するのはまさしく仁である。もし曾子が仁を使って一貫の字を解釈したならば、逆に本体と作用を見失って、もうこれを一貫と言うことはできなくなる。このように「貫」を説明してはじめて完璧である」と。

【周謨録】

注

- (1) 道を違：からず―「違道不遠」と後半に現れる「施諸己而不願、亦勿施於人」は、本訳注(二三)の(里15・69)条に既出(その注(2)を参照)。
- (2) 己の欲：ざる所―「己所不欲」と後半に現れる「如己所不欲、勿施於人」は、本訳注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(2)を参照)。
- (3) 動くに：以てす―「動以天」と後半に現れる「以己及物仁也、推己及物恕也」は、本訳注(二二)の(里15・57)条に既出(その注(5)を参照)。
- (4) 聖人の：れなり―「聖人全：恕是矣」は、張栻『南軒論語解』里仁篇に「聖人全乎此、天之道也、曾子所稱夫子忠恕是矣。賢者求盡乎此、人之道也、子思所稱忠恕是矣」とあり、『語類』に記される「求盡夫此」の「夫」は「乎」の誤りであることが分かる。そのため、ここでは『南軒論語解』にある「求盡乎此」に基^づき訓読と口語訳をした。
- (5) 己を盡：用なり―「盡己爲：之用也」は、集注に引く程頤の語。本訳注(二三)の(里15・63)条に既出(その注(4)を参照)。
- (6) 模―「模」は、周模。本訳注(二六)の(里10・2)に既出(その注(1)を参照)。